

報 告

多様な学生に対応した実習指導室の役割

——教職員の「協働」による効果的な実習指導方法の検討——

The role of Practical Training Room to meet the diverse needs of students

——Examination of effective methods for Training Instruction in “cooperation” with teachers——

曲 田 映 世・中 西 利 恵
石 沢 順 子

キーワード 実習指導室、教育方法、協働

1. はじめに

保育者養成の現場では、保育に対する様々なニーズの急速な進展に対応すべく、養成教育の質的な向上が求められ続けている。教科ごとに分化・構造化された知を習得させる教育の質はもちろんであるが、分化された知を実践知へと統合する学習の場として実習の質もますます問われている。実習に関する効果的な指導のあり方に関して、全国保育士養成協議会の研究大会をはじめ、保育関連の学会においても毎年数多くの報告がなされており、実習指導の課題の大きさがうかがわれる。一方、学生が抱える多様な生活課題や学習課題に向き合いながら、いかに実習教育を実現させるかという点も大きな課題である。学生の多様化の実態については、リクルートマーケティングパートナーズが発表した「入試制度に関する学長調査（2013）」¹⁾の結果からも明らかにされており、例えば全体の約

9割が「自校の学生の学力に課題がある」と回答していた。さらに、本学で実施している「大学生基礎力調査」からも、学生の学力や生活実態には個人差が大きいことが報告された。「学力低下」や「コミュニケーション能力の減退」などの実態から、対人援助の専門職である保育者を養成するための実習指導方法の継続的な検討が求められている。

子ども発達学科でも引き受けた一人一人の学生の学びの実態に応じた教育のあり方を模索し続けている。各教員が取り組みの工夫を行うだけでなく、職員も含めた組織間の連携や協働に取り組んできた。特に、保育者養成校での実習指導における教職員間および学生間の共通理解と協働のあり方については、全国保育士養成協議会が保育実習指導のミニマムスタンダードを作成する研究（2004～2005）の中で、養成校が取り組むべき重要課題として挙げられている²⁾。

以上をふまえ、本研究では、多様な学生の学

びの実態に応じた実習指導において、職員（実習指導室助手）が学生支援活動の主体を担っている実習指導室の役割に着目する。そして、教員と「協働」して取り組むことにより、さらに教育効果を高める指導方法について検討することを目的とする。

2. 本学の実習指導体制の現状

(1) 学外実習の概要

相愛大学人間発達学部子ども発達学科では、保育士資格・幼稚園教諭一種免許・小学校教諭一種免許の3つの資格・免許を同時に取得できる。資格・免許取得のための学外実習科目は、独自科目も含め1回生から4年間を通して開講されている。

学外実習の流れについては、1年次には最初の保育・教育現場での体験的学習として、「保育・教育実践学習」（保育所・幼稚園・小学校のいずれかで1日実習）を取り入れている。2年次には「保育所実習」と「保育実習Ⅱ」（保育所での実習、各10日間）、3年次には「施設実習」（児童養護施設等での実習、10日間）、4年次には「教育実習」（幼稚園・小学校のいずれかでの実習、3週間）、そして選択必修である「インターンシップ実習」（保育所・幼稚園・小学校・施設・小児病棟のいずれかでの実習、5日間）を実施している。学外実習科目の詳細については、平成26年度相愛大学講義要項³⁾に記載している。

(2) 実習指導室の概要

学外実習をサポートする部署としては、保育・教育実習指導室、小学校教育実習指導室の2つの実習指導室と合同研究室がある。いずれも学生が立ち寄りやすい子ども発達学科の演習室

や子ども発達学科教員の研究室などが隣接している場所に設置されている。開室時間は午前9時から午後5時までで、その間は助手（子ども発達学科実習指導室の助手は教務系嘱託職員である）が常駐している。時間外や休日については実習指導室専用のアカウントを設定し、学生たちも含め常時連絡が取れるような体制を設けている。実習に向けた学生への直接的な指導として、大学側のガイダンスや実習にかかわる個別の指示や指導、具体的な準備等に関しては、実習指導室を中心に展開される。

また、実習に向けた指導における実習指導室の役割として、事務的な手続きなどのサポートや学生の相談、実習現場との調整などを行っている。その他、具体的な例として、

- ・学外実習に必要な単位数および専門科目取得の確認
- ・実習先への依頼文や契約書などの書類作成
- ・個人票、出席表、評価票、実習記録などの校正、印刷発注
- ・実習健康診断書や予防接種の受診および発行確認
- ・細菌培養検査の手配

などを担っている。また、近年の学生は社会性の低下が懸念されているが、学生対応をする中で、態度や挨拶、服装や言葉遣いなどといった基本的な生活態度についても日常的に指導を行い、学生の一般社会常識分野の社会性育成をめざしている。

学生指導の方針や方法において一貫性を図るため、教員が実施する実習事前・事後ガイダンスに助手も同席し、学生と同じ指導内容を確認している。特に学生にとって初めての本格的な実習である保育所実習に関する授業についてはすべて参加し、学生の状況把握に努めている。さらに、実習の事前・事後を通して、トラブル

などの経緯や対応について記録を作成し、指導の全容を可視化する方法を試みている。これらの記録をもとに、実習担当者小会議（随時）、実習担当者会議（月2回実施）、学科会（月2回実施）で情報交換を行い、教職員間での協働体制を図っている。

（3）実習指導室の学生利用について

実習指導室での学生対応の実態は、日により多少の差はあるものの1日約30名の学生が来室し、1人あたり約5分～10分、内容によっては1時間から2時間にも及ぶことがある。対応の具体的な例として、

- ・実習に対して不安の高い学生への個別対応
- ・実習での体験や感想などを、他者に話すことで解消できる学生への対応
- ・資格、免許取得についての相談
- ・実習準備の具体的内容についての検討の補助
- ・学生生活全般における悩み相談
- ・進路についての相談
- ・就職関連についての問い合わせ
- ・教材の貸し出しや活用に関する相談

などがあり、教員に直接相談しづらいような内容が多くなっている。

実習指導室の利用に関する学生の率直な評価を調査するため、子ども発達学科の2回生から4回生を対象に質問紙をランダムに129名に配布し、全員から回答を得た。調査の実施にあたっては、回答結果が単位認定に伴う評価などに影響したり、不利益が生じたりすることはないため率直な意見を記入するように伝え、得られた結果は実習指導室のよりよい環境作りの検討に活用することを説明した。設問の一つである「実習指導室があつて良かったと思いますか」に対し、「とてもよいと思う」「よいと思う」「あまり思わない」「思わない」の4件法で回答

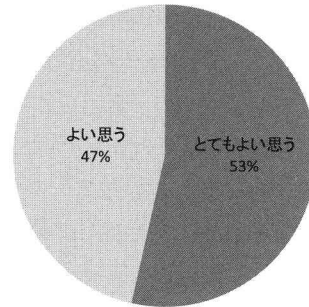


図1 実習指導室の利用に関する学生評価（n=129）

の結果、全ての学生が「とてもよいと思う（69名：53.5%）」もしくは「よいと思う（60名：46.5%）」のいずれかの回答であった。学生たちが実習指導室を必要な存在であると認識していることが示唆された（図1）。

さらに、実習指導室があつて良かったと思う理由に関する自由記述からは「実習関係の相談やサポートをしてもらえるから」「困ったことや不安なことをいつでも聞きに行けるので安心」「実習関係の資料や教材がたくさんあるから」といった回答が多く、実習に関する相談の場や教材・資料を調べられる場として役立つと捉えていた。その他、「授業や学生生活、就職活動のことなどいろいろな相談にものってもらえるから」「自分が間違えた時にもしっかり指導してもらえるから」という意見も多く挙げられており、実習に直接的に関連していない事項についてもサポートを求めている実態が明らかになった。一方、ごく少数ではあるが「（実習指導室に）入りにくい」という意見も挙げられていたことから、学生の中には「実習指導室はトラブルがあつたときに指導を受ける場」で、あまり近寄りたくないというイメージを持っている可能性もうかがえた。学生にとって実習指導室がより身近な場と感じられるように、実習指導室の活用方法について1回生から具体的に伝えていくなどの工夫も必要だと考えられる。

以上のことから、実習指導室に「学外実習のためのサポート」という本来の役割だけでなく、学生生活全般をサポートするという役割の拡大が求められていることが示された。

また、個々の学生について得られた情報は、実習担当教員と共有して実習の個別指導にも活かされており、実習指導室が学生と教員を繋ぐ場としても機能しているといえる。さらに、実習先への電話対応や問い合わせ、学生や保護者からの問い合わせなどへの対応から得た情報においても共有を図り指導に役立てている。

3. 効果的な指導方法の取り組み

子ども発達学科では、実習指導室の役割においてより効果的な実習指導を展開するため、教員と協働した教育方法を工夫し、以下のような取り組みを実践している。

(1) 実習の取り組み事項の可視化と実習指導にかかる情報共有化の工夫

大学教育再生加速プログラム⁴⁾では、これからの大学教育等の在り方として、教育方法の質的展開と全学的教学マネジメントの改善が求められている。子ども発達学科では、アクティブ・ラーニングの積極的導入や学修成果の可視化、教育課程の体系化を試みている。特に実習指導においては、実習指導室の助手と教員とが協働して学修成果の可視化について実施を試みている。

1つ目は、実習事前ガイダンス時に活用する資料として学生自身が取り組むべき作業および確認事項のチェックシートを作成している。作業や確認を完了および達成したら、チェックを入れる欄があり、学生が自己の実習への取り組み姿勢や状況を記載することにより可視化でき

るしくみになっている。学生の学びの意識化を図り、主体的な学びを引き出すことを目的とした試みである。

2つ目は、実習の取り組み事項を明記した模造紙大の一覧表を作成し、実習指導室壁面に掲示することにより、学生と教職員が常時確認できる可視化のしくみを開発した。一覧表には実習先への事前訪問や細菌培養検査の実施など学生が実習実施に向けて取り組むべき事項の欄を設け、それらの実施日程を学生自身が一覧表に書き込み、取り組みが完了したらシールを貼るというルールである。学生自身が現時点での自己課題を管理し、責任を持って取り組めるように工夫したシステムである。以前は実習指導に限らず作業や自己管理のできない学生が目立っていたが、このシステムを導入したことで、実際に学生同士で注意を喚起するなど実習への意識を高く保つことに役立っているようすがうかがえる。さらに、実習指導室に来室すれば、教職員もすべての学生の取り組み状況をタイムリーに確認できるため、共有した情報を元に実習担当教員と実習指導室の助手が協働して的確な指導を展開することも可能にしている。

また、学生に対して一貫した実習指導を行うためには、学生の現状や指導の状況について学科の教職員が共通理解を図ることは必須であるといえるだろう。しかし、「指定保育士養成施設教員の実態に関する調査」⁵⁾⁶⁾によると、保育実習指導に直接関与せず実習訪問指導を行う程度の教員は、実習指導の具体的な内容や対象学生に関する情報が少ないために訪問指導で困難を感じており、実習担当者とそれ以外の教員間でより丁寧で効果的な情報共有の方法を模索する必要があるとされている。

そこで、本学では、一人一人の学生の実態に合わせた効果的な実習指導を行うために、学生

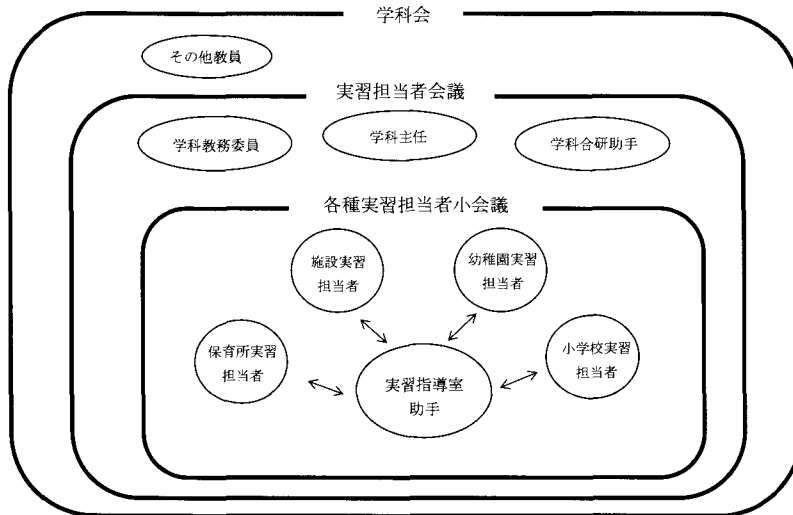


図2 実習指導にかかる情報共有化のしくみ

の学びの実態について、実習担当教員だけでなく、学科の教職員間で情報を共有化するしくみを作っている（図2）。実習に向けた事前指導から実習本番、事後指導を通して、学生の取り組み状況や実習に関するトラブルをまとめた一覧表で可視化した情報を活用し、各種実習担当者と実習指導室助手との小会議、実習担当者に主任や教務委員も参画した実習担当者会議、そして学科教職員全員が構成員である学科会において実習にかかる情報の共有を図っている⁷⁾。

実習に向けた取り組みや実習先からの評価等が芳しくない学生への特別対応等については、小会議で検討した指導方針について、実習担当者会議で適切であるかを検討した上で、最終的に学科会で協議し承認を得る体制を取っている。また、学科会では実習担当以外の教員からも学生の授業態度や日頃の取り組み姿勢などの情報収集し、実習指導に反映している。このように、学科の教職員全員が実習指導を中心として学生の情報を共有し、それぞれの指導場面に活かすことでより効果的な教育を行うことに繋がっていると考えられる。会議で共有する情報

の一覧表を作成するには、実習前・実習中・実習後にわたり継続した記録が必要である。特に、トラブルに関する記録については、前後の状況および対処方法等に関する詳細な記録が求められる。実習が実施される夏季および春季休業中も助手が常駐し実習現場からの連絡に備えると共に、そこで得た情報をもとに記録を作成することは重要な実習指導室の役割である。

以上のように、学修成果を可視化する複数のシステム導入や情報共有化の工夫により学生の学びの意識を高めると同時に、多様な学生を対象とした効果的な実習指導を行うことができていると考えられる。

(2) 学生の特性に合わせた実習指導の協働

①実習後の「自己評価」と「現場評価」を活用して

学生の特性を把握するために、教員と実習指導室が「協働」して実習後の「自己評価」と「現場評価」を比較し、両者のズレ方を実習指導に活用する方法の研究を行ってきた。研究の詳細については、中西ら（2010、2011、2012、

2013)^{7)~10)}の一連の報告を参照されたい。

実習指導室での具体的な学生対応の方法として、「現場評価」よりも「自己評価」が高い傾向にある学生に対しては、日常生活でのマナーや態度も含めて、自分自身の取り組み方が不十分であることに気づくよう根気強く指導し、課題を正確に捉えられるようにサポートしている。例えば、

- ・実習の課題に対して取り組み姿勢が不十分であった場合に、教材などの活用を促し、具体的な取り組み方法を示し、サポートを行う。
- ・実習の記録などの提出時に、実習についての会話から課題の捉え方に問題があると感じられた場合は、質問をしながら方向性の見直しができるようにサポートを行う。

などが挙げられる。

また、「現場評価」よりも「自己評価」が低い傾向にある学生に対しては、自己肯定感を高められるように励ましながらサポートしている。例えば、

- ・実習指導室で自主的に勉強している際に、積極的に肯定的な言葉かけを行う。
- ・実習の記録や課題の提出時に、実習への取り組み姿勢などを認め、励ます。

などが挙げられる。

このように、「自己評価」と「現場評価」を活用し、教員による一斉指導だけでは完了が難しい指導については、実習指導室の助手が個別のサポートを行っている。

②「保育所実習」のふり返りを活用して

より効果的な方法を検討するために、「保育所実習」を履修した学生に対して、1回目の自己評価後に実習記録を活用した課題抽出作業および集団スーパービジョンを取り入れた。その後、2回目の「自己評価」を実施し、点数の変

動を検討した。

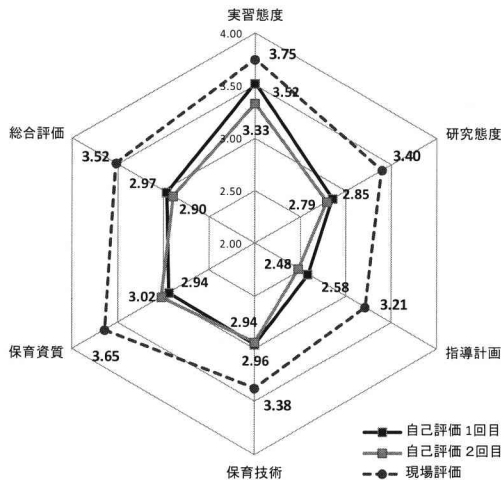
実習記録を活用した課題抽出作業は、記録の指導内容から自分の課題を抽出し、次回の実習にむけて具体的な改善方法を考察するためのワークシートを利用して行う。項目としては、「実習態度や取組姿勢について」や「子どものかわり方やとらえ方について」、「実習記録や指導計画について」などがあり、実習評価の観点に沿って分類している。

実習指導室では、このワークシートの添削を行っている。その際には、その学生の特性や性格に合わせて言葉かけや対応に配慮している。また、自己の課題を捉えられていない学生に対しては、実習記録に書かれた指導内容のふり返し作業に付き添い、課題を抽出できるようにサポートを行っている。

次に、集団スーパービジョンではグループ毎のバズセッションを基盤として実施した。同じ立場の学生の体験を共有することによって、実習での体験を客観的にふり返し、次回の実習への課題を見いだすことを目的として実施している。ここでの学生のふり返し内容を個別のサポートの参考とするため、実習指導室の助手も同席している。

話す内容は事前の授業で提示し、まとめておくように指導を行っている。具体的な項目は「子どもや保育者ってすごい!」と思ったこと(感動・発見)、「しまった」「こんなはずじゃなかったのに…」と思ったこと(失敗・反省)などで学生が身近に感じ、語りやすい内容とした。バズセッション後には、「みんなの体験を聞いて感じたこと」、「次の実習に向けての目標や意気込み」についての事後レポートを作成し、より学生自身の課題を明確にした。

上記2つのふり返しを実施後、2回目の「自己評価」を行い、その集計は実習指導室が行っ



※各項目 1（もっとも低い評価）～5（もっとも高い評価）の 5 段階で評価

図 3 評価項目別の自己評価（1 回目・2 回目）と現場評価の平均点のレーダチャート

た。結果については、「実習態度」「研究態度」「保育計画」「保育技術」「総合評価」の 5 項目で平均点が減少した（図 3）。これは実習後に様々な形で振り返りを取り入れたことにより、学生自身が具体的な課題を認識し、問題意識が高まったためではないかと予想される。しかし、かなり少数であるが、各項目においてさらに「自己評価」が「現場評価」よりも高くなり、よりズレが大きくなった学生もいた。こういった学生に対しては、実習担当教員が個別に指導を行い、具体的な対応をし、本人が自己の課題を正確にとらえられるようにフォローアップを行った。全体的には、「現場評価」よりも「自己評価」が低く、自己肯定感が低い学生が多いため、学生には個別のスーパービジョンが重要となり、フォローアップが必要であると考えられる。

このように、教員と実習指導室が協働して「自己評価」や「現場評価」、「保育所実習」の振り返りなどを活用し、学生の特性を把握している。それを基に一人一人に合わせた実習指導

を行っている。きめ細かい指導を実現するためには、学生の状況や取り組み姿勢をできるだけ正確に把握し、把握した情報を元に授業以外での様々なフォローを展開できる実習指導室の存在は、欠かせないと考えられる。

（3）実習指導室における学習環境の工夫

保育所や幼稚園での実習に向けた準備等で学生が利用することを前提に、保育に必要な情報や教材ができるだけ実習指導室で手に入れられるような環境作りを試みている。

保育に必要な情報や教材として、保育に関する図書や雑誌、ピアノや教材作りのテキスト、就職採用試験の参考書、さらに絵本や紙芝居、エプロンシアターなどを整備し、貸し出しなども行っている。室内には図書や教材を配置した書棚や棚だけでなく、その場で作業ができる大きな机とイスも設置している。学生が調べた資料をもとに、助手にアドバイスを求めながらその場で作業ができるようになっている。前述のアンケート調査でも良かったこととして「机と椅子があり、実習指導室内で作業できる」といった回答があった。また、実習指導室に隣接する子ども発達学演習室、保育・教育職演習室でも、授業で使用していない時間は学生が自由に作業できるようにしている。いずれも、学生の自主的な学びの場として積極的に活用できるような環境作りをめざしている。

また、近年の学生は自然と触れあう機会が少なく、動植物への興味も薄れ、実際、「虫が苦手」という学生が多く、生き物と触れあったり、植物を育てたりする体験は非常に乏しくなっている。一方、『保育所保育指針¹¹⁾』や『幼稚園教育要領¹²⁾』においては、動植物にふれあう大切さが記されており、多くの保育・教育現場で自然とかかわる保育・教育活動の実践が



図4 実習指導室での観察の様子

取り上げられている。そこで、学生たちが身近なところで生き物への愛着や理解を深められることを目的に、実習指導室で蝶の幼虫・メダカなどを飼育し、日常的に観察できる場として活用している（図4）。このような環境の構成についても、教員と実習指導室が協働して実現している¹³⁾。

さらに、専門職育成のため教育改革経費を活用したプログラム（保育・教育現場で活用できる紙芝居のスキルをプロから実践的に学ぶ「のまりんの紙芝居劇場&紙芝居実践講座」、学生と近隣の保育施設園児を対象に本物の木とのふれ合いを通した感性教育を実施する「木薫（もっくん）－木の温もりを感じて」など）や授業実践のようすを撮影した写真を実習指導室に掲示している。このように活動のようすを可視化することで、参加した学生へのふり返しだけでなく、参加していない学生に対してもこれからの学びに期待を持ち、自分もこのような活動に参加したいと思うような主体的な学びへ繋げる効果をめざしている（図5）。

以上のように、子ども発達学科の実習指導室は単に実習に関する指導を実施するだけでなく、すべての学年の学生と教職員が交流する場「コモンズスペース」としての機能も有しており、実習指導を中心とした学生指導全般の基地



図5 活動写真の掲示

的役割を果たしている。多様な経験ができるような学習環境、つまりアクティブラーニング的な学習環境も有し、学生の能動的な活動を引き出す支援にもつながっている。この環境や役割を維持するためには、専属の助手が常駐しているということも重要なことであると考えられる。

4. おわりに

本研究では、多様な学生の学びの実態に応じた実習指導について、実習指導室が中心となって担う役割として、教員と「協働」して取り組むことによりさらに教育効果を高める指導方法の実践に関する検討を行った。

効果的な指導方法の取り組みとして、まず実習と取り組み事項の可視化システムの開発と実習指導にかかる情報共有化に取り組んだ。学生各自が行う自己点検用のチェックリスト表や、実習指導室の壁面を活用した模造紙大の取り組み状況が一目瞭然で確認できる一覧表を活用したシステムを導入した。それらを実習指導室が中心となって教員と協働して運用することで効果的な指導が可能となっていることが確認できた。さらに、授業での一斉指導だけでは対応し難い様々な問題に対して、実習指導室での一人

一人への対応が重要な意味を持つこと、そして教職員が学生情報を共有し協働することでよりタイムリーで的確な指導が可能になることも確認された。また、実習指導室の環境構成を工夫することによりコモンズスペースとしての機能させることができ、学生のニーズに応じた適切な指導や苦手克服をめざした指導など、学生の能動性を引き出す学習環境として実習指導室の役割を拡大し、より効果的な指導を展開できる可能性が示唆された。

今後も実習指導室の機能や役割の検討を行い、学生の実態にあわせた新たな教育方法を教職員の協働により開発、実践し、保育者養成の質の向上をめざしたい。

参考・引用文献

- 1) 株式会社リクルートマーケティングパートナーズ, 2013, 入試制度に関する学長調査(2013), http://souken.shingakunet.com/research/2013_nyushi_01.pdf
- 2) 全国保育士養成協議会編, 2007『保育実習指導のミニマムスタンダード』北大路書房, pp.145-150
- 3) 平成26年度相愛大学講義要項
- 4) 文部科学省, 2014, 大学教育再生加速プログラム(Acceleration Program for University Education Rebuilding: AP) 事業説明資料, http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/coc/_icsFiles/afidfile/2014/01/22/1343245_03_1.pdf
- 5) 社団法人全国保育士養成協議会専門委員会, 2011「指定保育士養成施設教員の実態に関する調査」報告書Ⅰ－調査結果の概要－, 保育士養成資料集第54号, pp.152-161
- 6) 社団法人全国保育士養成協議会専門委員会, 2012「指定保育士養成施設教員の実態に関する調査」報告書Ⅱ－調査結果からの展開－, 保育士養成資料集第56号, pp.66-85
- 7) 中西利恵・曲田映世・藤本麻子・山口美智子・岩口摂子・木村久男・細川速見・山本和明・渡部美穂子・川中美津子・高岡昌子, 2013, 変化の時代における保育者養成教育のあり方－特に学外実習指導における効果的な教育方法の検討－, 相愛大学研究論集第29巻, pp.73-79
- 8) 中西利恵・大森雅人・益田圭・曲田映世・高濱麻貴, 2010, 実習指導の効果を高める教育方法の研究－保育所実習における学生の自己評価と現場評価の比較検討から－, 相愛大学人間発達研究, 1, pp.31-38
- 9) 中西利恵・大森雅人・曲田映世・高濱麻貴, 2011, 実習指導の効果を高める教育方法の研究(その2)－学生の自己評価と現場評価のズレを活用した事前・事後指導のあり方－, 相愛大学人間発達研究, 2, pp.47-54
- 10) 中西利恵・大森雅人・曲田映世・高岡昌子・山口美智子, 2012, 実習指導の効果を高める教育方法の研究(その3)－幼稚園・保育所での実習における学生の自己評価と現場評価の比較検討から－, 相愛大学研究論集第28巻, pp.167-180
- 11) 厚生労働省編, 2008『保育所保育指針解説書』フレーベル館
- 12) 文部科学省, 2009『幼稚園教育要領解説』フレーベル館
- 13) 中西利恵・木村久男・曲田映世・井上律恵・藤本麻子, 2013, 大学キャンパスにおいて保育者・小学校教師を志す学生の自然への感性を育てるしかけづくり(1)－大学キャンパスの自然を生かした学びの環境づくり－, 相愛大学研究論集第30巻, pp.43-54.
- 14) 西垣美穂子, 季刊保育問題研究, 2009, 実習生との関わりからみる実習指導室の役割とは－保育士養成校の人材育成課題と学生の成長を通して(特集 未来の保育者を育てる実習のあり方)－(実習室から), 季刊保育問題研究(237), 8-45, 新読書社
- 15) 阿部直美, 2010, 実習指導室の役割に関する考察: 実習指導室・幼稚園実習担当活動報告を通して, 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, pp.145-154